

# 図書館報

SEINAN GAKUIN  
UNIVERSITY  
LIBRARY BULLETIN  
2007. April No.162

## 図書館のトマソン

### 1-2 図書館のトマソン

これはパイプオルガンではない 図書館長 後藤 新治  
 庄子いわく『無用なればこそ用の足し』 前図書館事務次長 篠崎 珣

### 3-4 世界の図書館 中国・台湾編

経済学部 国際経済学科 教授 村岡 伸秋  
 国際文化学部 国際文化学科 教授 新谷 秀明  
 商学部 商学科 教授 王 忠毅

### 5 知らないと損をする! レポート・論文作成法

図書館報課 小副川 明子  
 人間科学研究科 人間科学専攻修士課程 中尾 かおり

### 6 使ってみようシリーズ(6)

学術雑誌コーナー(2階) 図書館報課 相田 芙美子

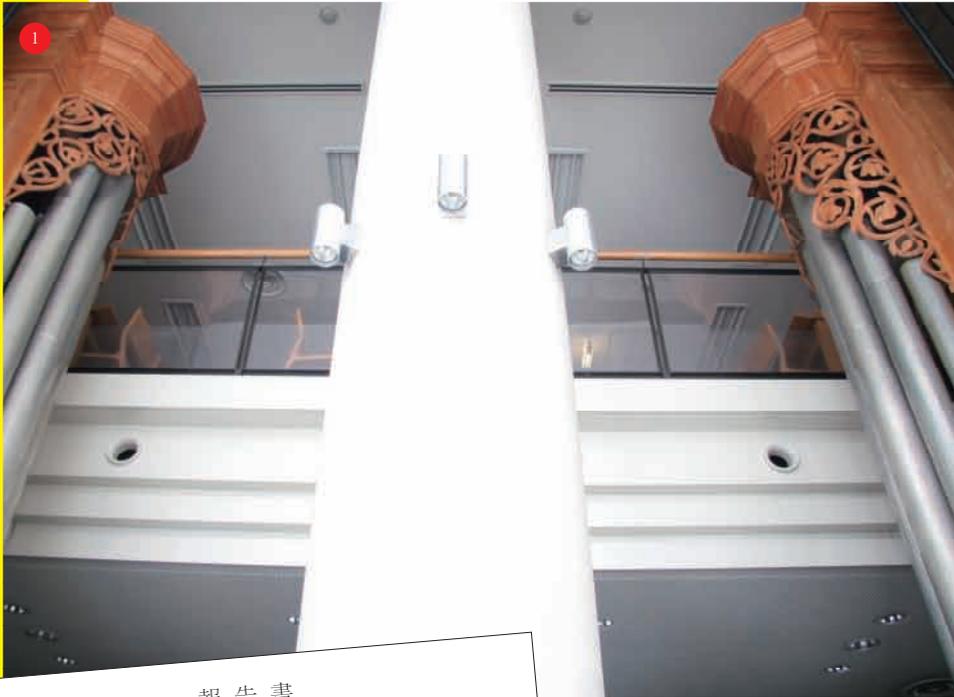
### 7 蔵書ギャラリー no.3 国際文化学部 国際文化学科 教授 王 孝廉

# 図書館のトマソン

## これはパイプオルガンではない

図書館長 後藤 新治

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。で、さっそく写真1を見てください。場所は図書館ですが、中央の円柱をはさんで左右に対峙するものはいったいなんだと思いますか。どうもパイプオルガンらしいのですが、それにしては鍵盤が見あたりませんし、突如トッカータとフーガの演奏が始まったなどという報告も今のところ受けていません。発見当時の報告書がありますから、まずこれを読んで下さい。



1. 図書館エントランスホールに突如出現した疑似トマソン (2006年9月10日撮影)
2. 図書館雑誌架前で捕獲中の疑似トマソン (右) (2006年9月9日撮影)
3. 解体中のランキンチャペルとパイプオルガン足場の奥にある本柱とステージ上に並べられたパイプに注目 (2006年7月26日撮影)

### 報告書

物件/図書自動配架装置風構造体  
発見場所/福岡市早良区西新6-2-92 西南学院大学図書館  
発見年月日/2006年8月17日  
発見者/清掃委託業者のT氏(個人情報保護のため匿名)  
発見状況/当物件は西南学院大学図書館1階エントランスホール北側の雑誌架前に突如出現した。2つの構造体は外見上近似しており、各幅190cm、奥行150cm、高さ600cmの木製箱の中には大小合わせて約30本の金属製パイプが収められている。木箱上部には透かし彫りによる装飾が施され、パイプ下部にはいずれも水平方向に細長い開口部がある(写真2を参照)。当物件はかつて報告者が西南学院大学ランキンチャペル(2006年夏頃解体)で目撃したパイプオルガン(1987年故辻宏氏製作)の一部に酷似しているが(写真3を参照)、このように巨大な構造体がある狭い図書館玄関をくぐり抜けて持ち込まれたとはとうてい信じがたい。しかもエントランスホール吹き抜けの際間に最初からあったかのようにビタリと取まっている様は、その用途不明の不気味さともあいまってほとんど「超芸術トマソン」の域に達している。あるいはパイプ下部に開けられた穴に大きさに応じた返却図書を差し込めば、自動的に請求番号を読み取ってもとあった場所に圧搾空気力で配架する最新装置のデモンストレーションかも知れない。いずれにしろ突然大音響を発する危険性もあり、現在慎重に調査中である。

報告書に出てくる「超芸術トマソン」とは、赤瀬川原平氏(2006年度のSEINAN SPIRIT巻頭のDear Studentsに4回連載)らの命名になるもので、「不動産に附着して美しく保存されている無用の長物」というのがいちおうの定義になっています。トマソンとはこの言葉が生まれた1982年当時、ジャイアンツの4番バッターとして高給で処遇され活躍を期待されながら、三振に次ぐ三振でとうとう解雇されてしまったゲーリー・トマソン選手に由来します。つまりトマソンとは大切に保存されながら、まったく役に立たないものの代名詞としてその後人口に膾炙していったわけです。

しかし当物件ははたして真正なトマソンの仲間に入れてもらえるのでしょうか。赤瀬川氏はトマソン成立のためには「無意識に裏打ちされたところの手厚い加護」が必要とも述べています。よく見ると2体の物件は上部がアームで横の壁にしっかりと固定され、たしかに「手厚い加護」を感じますがそれが「無意識に裏打ちされた」行為かどうかははなはだ疑問です。またかりにこれがパイプオルガンの一部であることが判明した場合、物件は「たちまち超芸術から抜け落ちて芸術品」になりがってしまう可能性も否定できません。トマソンの極意とは氏によれば「ひたすら見つけるだけで作るものではない」と。含蓄のあることばです。とはいもものこの用途不明で怪しい物体には端正な美しさとともに捨てがたいユーモアがそこはかとなく漂っており、現時点では「疑似トマソン」と認定しておきたい、というのが館長としての見解です。

学部の学生さんたちにはお見せできないのが残念ですが、じつは図書館の閉架書庫はトマソンの宝庫です。新学期に希望ゼミごとに開催される「新入生図書館利用説明会」は、先生の許可さえあれば、建築探偵団気取りでこのトマソン宝庫、いや閉架書庫に侵入できるまたとない機会です。そこで新たなトマソンを発見したら、こっそり館長(gotou@seinan-gu.ac.jp)にも報告して欲しいと思います。みなさんのご来館をお待ちしています。

(国際文化学部 国際文化学科 教授)

#### <参考文献>

- 1) 赤瀬川原平著『超芸術トマソン』ちくま文庫、1987年(開架2階 520/4/56)
- 2) 赤瀬川原平編『トマソン大図鑑 無の巻/空の巻』(2冊)ちくま文庫、1996年(開架2階 520/4/57-1~2)
- 3) 赤瀬川原平・藤森照信・南仲坊隆『路上観察学入門』ちくま文庫、1993年(開架3階 361/78/83)
- 4) 藤森照信著『建築探偵の冒険』筑摩書房、1986年(開架 523/0/20)
- 5) ミシェル・アコー著、豊崎光一・清水正訳『これはパイプではない』哲学書房、1986年(開架2階 135/5F42/11)

図書館の内外には、余り役にはたさないように見え、しかし周囲の景観に溶け込み、なんとか余生を送っている建造・構築物がある。それらは図書館の増改築やキャンパスの整備のために生まれ、次第に忘れ去られ、このような機会に思い出される。その間は、荘子のいう『無用の用』としての役を果たしているのであろうか。

## 1 開かずの扉・・・旧館玄関

1992(平成4)年に図書館新館部分が竣工した際、1968(昭和43)年にできた図書館(旧館)の玄関はそのまま取り残された。大型荷物の搬入以外には役に立たない「開かずの扉」となっている。全面ガラスの扉には内側から濃いスクリーンを貼付しているため外からは鏡の役割をしている。外来の方や学生などでたまに玄関と間違える人がいるが、邪魔物でもないので、急に変更することはない。



平成4年8月まで  
使用した旧玄関

## 2 大地震で分離?・・・新館と旧館の境界

図書館各階の参考図書コーナー奥の閲覧室は旧館部分にあたる。通路を見れば、わずかに新館と旧館の境界がわかるはずである。新館と旧館は構造上まったく別の建物である。これは基礎工事と床荷重の違いであると思われる。

学院は1916(大正5)年に大名町(平和台読売ビル付近)に創設されたが、創立者C.K.ドージャー先生が選ばれた新校地は百道海岸の白砂青松の地。1922(大正11)年、ここに高等学部本館が大名町から移設された(東キャンパス中学部校舎を経て再移設)。大学図書館旧館は高等学部本館(1965年頃解体)と旧大学2号館(1985年頃解体)のちょうど真ん中あたりに建っていて、当然この下は砂である。この付近は、おそらく文永・弘安の役に鎌倉武士が元軍を迎え撃った激戦の跡地の一部でもあろう。

2年前の地震では館内の書架が倒壊したが、建物はとりあえず大丈夫であった。そのとき以上の大地震がくれば、基礎の弱い旧館は砂地に引き込まれてしまい、新館・旧館が分離するのではないかと、余計な心配をしている。

これで旧館部分で勉強する学生が減って新館部分があふれることはないとは思わが…。



新館と旧館の境界 プリキ蓋の部分

## 3 無用、無惨・・・ブックポスト

図書を閉館日、夜間にも返却できるようにと考案したものだが図書の傷み、火災などが懸案となり使用せずのままである。今後、多様な運用が採用される場合には、ブックポストの活用も期待される。玄関の右奥に見えるが、今は無惨。



使われぬまま15年

## 4 木洩れ陽の道・・・デカンショの文庫本を片手に??

図書館の外にも目を向けてみよう。②で紹介した高等学部本館は、1965(昭和40)年頃には大学短期大学部児童教育科(女子学生のみ)の校舎となっていた。今のクロスプラザ前の信号のところ(西側)に正門があった。全ての学部学生もその校門から入校でき、現本部建物南側の木洩れ陽の中を歩いて構内に入って行った。現在も名残りがあがるが、ちょっといい雰囲気だった。図書館玄関南側のブロック石垣の上にあたり、普通は見にくい位置になっている。クロスプラザができ、歩道(市道)の往来が多くなったので、個人的には構内通路を復活してもらいたい気がある。貯水タンクと本部建物1階、隣のパーキングを樹木で少し隠せば感じのよい道に復活するはず。



旧短大部校舎(現本館付近)



木洩れ陽の道の名残りが

当時、図書館前広場付近に旧2号館があり、掲示板もあったので、休憩時には学生が語らったり、逍遙する姿もあった。ベンチにかけ、デカルト、カント、ショーペンハウアーの文庫本を片手に瞑想にふけた高尚な思い出は筆者には一切ない。その旧2号館前付近にあった



昭和40年頃使っていた石段の一部

当時の歩道とキャンパスに昇降する石段の一部が図書館の裏に残っていて、懐かしい。

図書館に隣接する静かな雰囲気が若干ではあるが残っていることはいい。大切に保存したい。

中国江蘇省の省都南京のほぼ中心に位置する南京大学は、中国教育部の管轄する全国重点大学のひとつである。私はこの大学で、1980年から81年、そして2004年から2005年の2度にわたって、都合2年間の留学生活を送った。南京大学は1902年に創立され、すでに100年余の歴史をもっている。欧米列強の後塵を拝し、近代化が強く意識され始めた清朝の改革に沿って、近代的学制が形成されたころの開学である。

今日の南京大学は、理科系、社会系や文科系の計28の国家重点学科を擁する中国有数の総合大学である。特に、哲学や歴史系統では中国のトップ水準にある。

南京は、中国の歴史の中でたびたび都が置かれた古都でもある。1911年の辛亥革命後に成立した国民政府もまたこの南京を首都とした。そのことにより、日中戦争下の1938年、南京は陥落し、30万人ともいわれる南京市民が犠牲になったことでも有名である。南京陥落の日、この南京大学のキャンパスは「国際保護地域」に指定され、南京を占領した日本軍でさえ一歩も中に入ることではできなかった。おびただしい人がこの南京大学のキャンパスに避難したという悲しい歴史をもっているのである。しかし、今日、ゆったりとした樹木や草花に囲まれた静寂で平和なキャンパスを散策すると、戦争をしのばせるものは何もない。

現在の南京大学図書館は、漢口路の北側キャンパスの正門に入つてすぐ東側に建つ、鉄筋コンクリート4階建ての近代的建物である。全館コンピューターシステムが導入され、利用者は入館も借り入れもカード1枚で済みます。総蔵書数は419万冊という。漢口路の南側は、学生や大学院生の宿舎が立ち並ぶ生活圏になっていて、学生の場合、一部

屋に8人が住んでいる。そうした決して恵まれてはいない居住条件も影響していると思われるが、南京大学の図書館はいつも学生でいっぱい、朝の8時半には、座るべき席がなくなってしまう。

図書館は、2階部分に雑誌室と外国文献コーナーが、3階部分に一般図書閲覧コーナーがあつて、いつも満員である。すでに学生たちの希望に比べて手狭になっていることがわかる。本来、南京大学の図書館は、現在大学本部として使われている真ん中に尖塔をもった中国様式の風情の建物が使われていた。私も最初の留学時にはここを使った。しかし、当時は改革開放政策が始まったばかりで、依然として「政治の季節」であつたため、私の専門とする「中国経済」にかかわる専門書などはほとんどなかった。だから、せいぜい日本には入ってこない現地の新聞を読むことぐらいしかできなかった。今は自由な専門研究ができるようになったから、経済関係の図書も充実している。

南京大学は、かつて政権の膝元だった関係もあつて、また、アメリカのミッションスクールだった時代もあつて、当時としては世界の

最先端の中国経済研究が行われていた。それをリードしたのが三代の中国農民の盛衰を描いた小説『大地』でピューリッツァー賞を受賞したパール=バック女史の夫君であるジョン=ロッシング=バック(J.L.Buck)教授である。バック教授は1930年代に全中国168箇所の村落の実態調査を行い、その成果を不朽の名著『中国の土地利用(Land Utilization In China)』に纏め上げた。中国農村経済研究に携わる私にとって、今なお学ぶことの多い、参考にすべき書である。今日、図書館旧館には、バック教授の愛用した万年筆や聖書を展示した部屋が残されている。その建物の周辺を散策するのが私の南京生活での思い出になっている。



【南京大学新図書館】

# 世界の図書館

「中国・台湾編」



【南京大学旧図書館(現大学本部)】



【上海図書館】



【台湾国家図書館】

上海図書館との出会いは、今から約20年前、復旦大学留学生として上海に滞在していた時に始まる。その頃の中国といえば文化大革命が終結してからまだ10年を経たばかりで、社会の様々な面で立ち後れが目立っていた。例えば、現在ならどこでも気軽にできる文献の複写も、当時の中国の大学や図書館にはコピー機そのものがほとんど存在せず、あったとしても中国人の収入からするとべらぼうに高い複写費を請求されるものであった。だから学生はおろか、研究者さえも滅多なことでコピーなどはしなかった。では研究に必要な文献はどうするのか。手書きで写すのである。私もあの頃、修士論文の資料を集めるために上海図書館の古籍閲覧室にせつせと通い、研究者とおぼしき年配の人々に混じって文献を借り出しては読み、大事な部分を写すという作業を延々と続けた。彼らに比べ多少は経済的に余裕のある資本主義国家の留学生であった私は、そんな非効率なことをしなくてもお金を出してコピーを頼むこともできたのだが、また周りには実際にそうしていた日本人も少なかつたのだが、私は書き写すことがここでの流儀なのだと考えた。そう割り切ってしまうと、中国人研究者たちと同じペースで書き写しを続けることが、なんだか心地よかった。それに手書きで写すことによって、中国語の文章の一字一句まで噛み砕くように精読する習慣が



[上海図書館でオンライン検索を利用する人々]

いたことは、予想外の収穫だった。

あの頃私が足繁く通ったのは、実は現在の上海図書館ではなく、旧上海図書館である。それは南京路に面した重厚な造りの建物で、戦前には競馬場のクラブハウスとして使われていた歴史的建築物であった。1996年に新しい上海図書館が淮海路(わいかいろ)にオープンし、旧館の建物は現在、上海美術館として使われている。新しくオープンした上海図書館はとても広くて明るく、近代的な設備が備わり、一般市民にも利用しやすくなっている。1300万冊以上の蔵書を有し、総合、社会科学、自然科学、古籍、近代文献、新聞雑誌、外国語書籍等々、20以上の閲覧室に分かれ、利用者の便宜を図っている。当然ながらオンライン検索システムも完備している。もちろん文献のコピーも大変便利になり、もう手書きで文献を書き写す研究者の姿もほとんど見られない。すべてがシステムティックに、効率的に再編されているのである。

旧館の時代は確かに不便ではあったが、カウンターの職員となじみになって雑談に花を咲かせたり、時には些かの便宜をはかってもらえたりと、いかにも中国的な温かさがあった。この新館にはもうそんな空気は流れていない。中国近代化の先頭を走る上海の、ひとつの姿がこの上海図書館に象徴されているような気がする。

台湾といえばグルメと連想されがちです。確かに台湾では美味しい料理が多様にあり、上等な料理から庶民的な屋台料理など考えられるものはすべて揃っているのではないかと思います。しかし、台湾には当然グルメだけではなく、文化の魅力も満喫できるところがたくさんあります。ここでは「台湾といえばグルメ」というイメージを覆すつもりはありませんが、台湾のもう一つの顔である「国家図書館」を紹介したいと思います。

台湾の国家図書館は台北市に位置して台湾の教育部(文部科学省)によって運営されている国立図書館です。その前身は1933年に中華民国の国民党政府教育部により南京に設けられた国立中央図書館です。1948年に国民党と共産党による内戦の影響を受け、国民党政府はその蔵書約13万冊を台湾に移送し、1954年に国立中央図書館として台北にて復館され、1996年に国家図書館と名称変更されて現在に至っています。

台湾の国家図書館の外観はごく普通の図書館に見えますが、実際は「漢学研究センター」を設置して大量の古文書を所蔵し、漢学振興に大きく貢献しています。例えば、国家図書館は、漢王朝(紀元前202~紀元184年)から清朝(1636~1912年)までの古代書籍約13万冊を所蔵しており、特に明王朝(1368~1636年)の書籍が

約6,000冊で最も多いです。それ以外の現代書籍などを含めて約300万冊を超えた図書・写本などを保管しています。特にその保管している古代文献の文化・歴史・資料的価値は第一級のもので、また、古文書の保護・保管・公開や利用者の利便性などを図ることにより、これらの古代書籍はすべてデジタル化、オンライン化されているため、利用者は世界のどこにいても国家図書館の「グローバル・ネットワーク・システム(<http://www.ncl.edu.tw/>)」を経由して容易にこれらの史料にアクセスすることができます。ちなみに、国家図書館は台湾におけるすべての大学の博士・修士論文をもデジタル化しているため、特に研究者の文献収集に大変便利なサービスを提供しています。もちろん、公開されている学位論文は著者の許可のあるものに限ります。

国家図書館は台北市内の中心に位置し、ビジネス街から車で10分程度という大変便利な立地に加え、台北市民の憩いの場となっている中正記念堂(台北地下鉄の中正記念堂駅前)と道路を挟んで向こう側にあります。そのため、国家図書館は常に満員に近い利用状況です。

台北を訪れることがあれば、美味しい料理はもちろんのことですが、異文化体験という意味では是非台湾の国家図書館を訪れてみてください。そこで、必ず台湾のもう一つの顔を発見できると思います。



[台湾国家図書館の閲覧室]

知らないと損をする！  
レポート・論文作成法

図書情報課

小副川 明子

有価証券報告書を見てみよう！

皆さんは有価証券報告書を実際に目にしたことがありますか？

商学、会計学、経済学のレポート・論文作成・課題の理解には重要な資料となるものです。

授業で耳にしたり、資料の中で一部分を目にすることは多くても、実際に完全なものを見る機会は少ないのではないのでしょうか。

そこで活用していただきたいのがEDINETです。図書館ホームページの学術ポータルサイトにリンクされています。EDINETでは金融庁に提出された有価証券報告書をオンラインで閲覧できます。最新の報告書はもちろん、過去の報告書も公開されているため、同一企業の期別比較が可能です。また現在約1400社の報告書が閲覧でき、他業種にわたる企業の業績比較を行うこともできます。

また、商法、金融商品取引法、会計基準などは頻繁に改正、更新されています。EDINETでは最新の法、基準に基づいて作成された有価証券報告書が閲覧できますが、本や雑誌などオンライン情報以外の資料を図書館のOPACで検索する際も、出版年を最近に設定するなどして収集資料を絞り込むと、正確な情報を手に入れる近道となります。

図書館にある様々な形態の資料を活用して、独自のレポート・論文を完成させましょう。

人間科学研究科 人間科学専攻修士課程

中尾 かおり

最良の知的環境を自分のものに！

皆さんは大学図書館をどのように活用していますか。ご存知のとおり、レポートや論文を作成するには、必ず裏づけする文献(資料・情報)が必要となります。あなたのレポートや論文の質を高めるためには図書館システムをしっかりと活用することが大切です。

その一つとして、学術ポータルを活用すること。その中にあるOPACやデータベース、オンラインジャーナルで先行研究を調べていきます。見つけた文献が本学にない場合でも、所蔵されている学外の機関からその資料の現物借用やコピーを取り寄せるILLサービスがあります。私はこのILLサービスを大いに活用しています。また、見逃してはならないのが、学術ポータルの中にあるパスファインダーです。これはテーマごとに関連サイトが掲載されているので、効率的に情報を検索できるようになっています。私の研究は教育関係ですので、教育をクリック。文部科学省などの教育関連機関のサイトで国・自治体レベルでの研究や政策など最新情報をチェックしています。

もう一つは、レファレンス・カウンターの活用です。ここで、図書館司書に必要な情報や資料の検索方法や入手方法を聞くことができます。図書館司書の方たちはとても親切なので一緒に調べてくれますし、また気軽に聞くことで新たな検索方法を学べるはずですよ。

皆さんも、大学図書館を大いに活用して知的環境を自分のものにしていきましょう！

大学生への「おすすめツール」

図書館ホームページ →  
学術ポータル → EDINET



「五十音」もしくは「提出者名」で検索すれば、調べたい企業の有価証券報告書を閲覧することができます。

大学生への「おすすめツール」

図書館ホームページ →  
学術ポータル → パスファインダー(教育)



教育に関連したサイトへのリンクだけでなく、図書の種類、OPACでのキーワード設定例、参考資料の紹介がされています。

## 『学術雑誌コーナー（2階）』

図書館がもっている資料の中で、本の次に多いのが雑誌です。雑誌は①新しい研究成果やニュースを速報する、②定期的に出版される、という特長を持っています。そのため各分野の新しい情報を知りたい場合に雑誌は欠かせません。

当館では学部ごとに各分野の学習・研究に役立つものを集めて『学術雑誌コーナー』を設けています。足をはこんで自分の専門分野に関連する雑誌にどのようなものがあるか知っておきましょう。

場所は2階です。階段をあがって右手を見ると低い書架が並んでいます[写真1]。書架は学部ごとに分けられています(書架の上にある見出しと配置表を参考にしてください)。各ボックスの扉には最新号が置かれ[写真2]扉を開けると約1年分のバックナンバーがはいつています[写真3](利用がおわったら、取り出したボックスが各階にある返却台に戻してください)。

学術雑誌コーナーに置いてある雑誌の中からいくつかをご紹介します。



写真1



写真2



写真3

## 経済学分野

[紹介者]

山村 英司先生

## 『経済セミナー』(日本評論社、月刊)

学部生全般が対象。特集や連載を中心に構成されている。

経済学的な考え方を知る上で参考になる。

## 『日経ビジネス』(日経BP社、週刊) [写真右]

意欲的な1・2年生、就職活動を控えた3・4年生向き。

企業や産業の「今」を知る上で格好の書である。就職活動や論文執筆に役立つ。

## 『日本労働研究雑誌』(労働政策研究・研修機構、月刊)

3・4年生向き。労働問題を、経済学、社会学、政治学など多方面の研究者が

分析している。卒業論文を執筆する際に参考になる。



## 商学分野

[紹介者]

高野 学先生

## 『宣伝会議』(宣伝会議、月2回刊)

学部生向けの雑誌。ヒット商品を生む広告・マーケティング戦略が参考となる。

## 『会計人コース』(中央経済社、月刊)

公認会計士・税理士受験生向けの雑誌。本試験に役立つ情報、問題が満載。

## 『週刊ダイヤモンド』(ダイヤモンド社、週刊) [写真右]

日本の経済・金融等の動向がわかるビジネス誌。業界研究にも役立つ。



## 児童教育分野

[紹介者]

西野 祥子先生

## 『初等教育資料』(東洋館、月刊)

堅苦しい名前ですが、教育の“今”の動きが手に取るようにわかります。特に「特集」は

その専門分野を代表する著者によって書かれていますから、雑誌の表紙にレポート課題と同じワードを見つけたら、とつてもラッキー!?

## 『たしかな目』(国民生活センター、月刊) [写真右]

暮らしと商品テストの情報誌。コンビニ弁当から教育などの様々なサービスまで、

市場にあふれる商品を片端からテスト・評価している記事は、とても面白い。

ものごとを多角的に捉え、考える視点を学べます。

## 『実践障害児教育』(学研、月刊)

発達に特別な支援を要する子どもの育ちを支えるための基本情報、最新情報が満載!



次号では、今回の続きとして学術雑誌コーナーにある社会福祉分野の雑誌を紹介します。

## 『民族問題五種叢書』

(1980年代、全105冊、北京ほか) [開架:389/2233/21~57、開架:222/37/11-1~9等]



この二種類の叢書は1960年代の雲南省のイ族と広西省のチワン族の歴史、社会、政治、文化についての貴重な資料である。



左衽(左見ごろが上前)は少数民族、服装の特徴である。右衽の漢民族服装とは大きく異なる。



仕事(布を織る)、祭り、集会和選挙。少数民族の服飾文化はその民族の歴史、起源や財力、身分を表現している。

1949年以後、中国の民族学には2つの大きな特徴がある。1つ目はマルクス主義を継承した民族学であると同時に西洋の民族学への研究を加え、批判、吸収している点。2つ目は中国民族学は政治とその実践を目的にして成立したという点である。

1954年中国政府は「民族普查」という全国的な民族人口調査を実施し、全国民に自分の民族を自己報告させた。するとその結果、漢族以外に自己報告された民族は400以上に及んだ。自己報告された400以上の民族の中にはいくつかの同一民族が含まれているのではないかと問題を解決するために、中国政府は「民族識別」(民族を識別し認識する作業)の遂行を提案し、全国の民族地区に対する調査研究を実施した。その結果、中国国務院により55の少数民族が認定され、それに漢族を加えて最終的に中国国内には56民族が居住していると規定した。

1956年から1960年の間、中国政府は少数民族居住地区に社会歴史調査組を派遣し、各地区で少数民族の社会経済発展レベル、階級状況、及び民族関係を深く調査した。そしてその調査結果を「民族改革」と「民族政策」を実施する際の根拠として用いた。

調査組のメンバーは共産党の幹部以外に、歴史学、言語学、考古学の専門家1000人以上で構成された。各調査組は1951年から「民族問題五種叢書」を執筆し、整理された資料は300あまり、字数は

3000万字に及んだ。しかし『五種叢書』は文化大革命期に、出版、流通を禁止されたため、1980年になってようやく政府は改めて出版計画を立て、1985年にほぼ全部出版されたのである。

「民族問題五種叢書」は次の五種である。

中国少数民族  
中国少数民族簡史叢書  
中国少数民族言語簡志叢書  
中国少数民族自治地方概況叢書  
中国少数民族社会歴史調査資料叢刊

以上の五種叢書の内容には中国少数民族の族源、族称、歴史、社会、経済、文学、芸術、宗教信仰、言語文字が包括されており、中国少数民族研究の重要な基礎資料である。編集して印刷に付す期間が、長いものでは20年以上も経ってしまっているため、紛失散逸したものも非常に多く、すべての五種叢書を収集した研究機関や大学図書館は非常に少ない。西南学院大学図書館は五種叢書の五種全種を収蔵しており、中でも少数民族の社会歴史調査資料叢刊はほぼ全書収蔵されている。しかし、この貴重な資料は長期間図書館閉架四層で静かに眠ったままで利用者が少ない。このことは誠に遺憾の至りである。

## 編集後記

今回は図書館のトマソンということで、本学の図書館における不思議な部分が紹介されています。トマソンとは「不動産に付着して美しく保存されている無用の長物」と定義されますが、学生のみならずにとっての図書館は無用ではなく必要なものです。しかし「そこにある」だけでは大学の施設の一つにすぎません。図書館を利用すればするほど、新たな発見へとつながり、それらを知識として吸収することができます。授業や課題だけの利用に限らなくてもかまいません。新聞や雑誌、DVDを閲覧することもできます。利用の仕方は十人十色です。「そこにある」だけの図書館とせず、「使う」図書館にしてください。(T.N)

## 西南学院大学図書館報 No.162

2007(平成19)年4月13日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511

福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426